

大阪狭山市文化財報告書40

陶邑窯跡群 陶器山2号窯



平成24年（2012年）11月

大阪狭山市教育委員会

陶邑窯跡群 陶器山2号窯

平成24年(2012年)11月

大阪狭山市教育委員会

序 文

大阪狭山市内には、狭山池をはじめとして私たちの先人が残した遺跡が数多く存在します。市域には陶邑窯跡群の陶器山地区及び狭山池地区に分かれた須恵器の窯跡が約90カ所知られています。

陶邑窯跡群は、今から千数百年前に成立して以来、およそ五百年もの間須恵器が生産され続けた中心地で、泉北丘陵一帯に約千基の窯跡が推定されている国内最大の窯跡群です。市域の西部には、陶邑窯跡群陶器山地区に属する約60基の須恵器窯が残っています。

このたび宅地開発に伴い、須恵器生産にちなんでその名が付いた陶器山において「陶器山2号窯」の発掘調査を実施しました。陶器山は平安時代の歴史書『日本三代実録』には陶山と記され、河内国と和泉国が薪争いをした山として知られています。

本書はその発掘調査成果をまとめたものです。本書が市民の皆様の郷土への愛着を深めるのに活用され、大阪狭山市の歴史の理解に役立つ一助となりましたら大幸いです。

最後になりましたが、調査の実施にあたり、ご理解ご協力を頂きました関係各位に心からお礼申し上げます。

平成24年(2012年)11月

大阪狭山市教育委員会

教育長 小林光明

例　　言

1. 本書は大阪狭山市今熊4丁目において計画された宅地開発工事に伴い実施した陶邑窯跡群陶器山2号窯の発掘調査報告書である。
2. 調査は平成23年1月5日から2月10日まで実施した。全体の調査面積は20816.10m²であるが、陶器山2号窯については平成23年2月1日から平成23年2月10日の期間に実施し、調査面積は64m²である。
3. 現地調査は大阪狭山市教育委員会教育部 社会教育・スポーツ振興グループの平野淳と土江文子が担当し、芝地夏美・大向智子・豊島享志が参加した。また、遺物整理は平成23年2月14日から平成24年10月12日まで行ない、原田美和・中紀子が参加した。
4. 陶器山2号窯の発掘調査においては、近畿建設株式会社の全面的な協力を得た。
5. 出土遺物の写真撮影は有限会社阿南写真工房に依頼した。
6. 調査について以下の諸氏からご指導・ご教示を頂いた。記して深謝申し上げたい。(敬省略)
泉谷博幸、乾哲也、小川裕見子、小谷正樹、小山田宏一、近藤康司、白石耕治、角南辰馬、高島徹、田中和弘、千葉太朗、菱田哲郎、森村健一
7. 本書の執筆・編集は土江文子が行った。
8. 調査で出土した遺物および記録図面・写真等は本市教育委員会で収蔵・保管している。
また、本書のPDFファイルは本市Webサイトで公開する予定である。広く活用されたい。

本　文　目　次

(頁)

序　　文	大阪狭山市教育委員会教育長 小林光明
例　　言	
第1章　調査地の立地と遺跡	
第1節　調査地の立地.....	1
第2節　陶邑窯跡群と金藏寺跡.....	1
第2章　調査に至る経過	
第1節　調査方法.....	3
第2節　陶器山2号窯本調査への経緯.....	3
第3章　調査の成果	
第1節　陶器山2号窯の発掘調査	
1. 遺構.....	5
2. 遺物.....	8
第4章　まとめ.....	11

挿図目次

(頁)

第1図 調査地周辺の小字名	1
第2図 陶邑窯跡群陶器山地区周辺窯跡分布図	2
第3図 調査位置図	4
第4図 調査区平面図	6
第5図 陶器山2号窯平面図	7
第6図 陶器山2号窯縦断面図・横断面図	7
第7図 出土遺物実測図1	8
第8図 出土遺物実測図2	9

写真目次

(頁)

写真1 陶器山2号窯から狭山池方面(北東)を見る	3
写真2 陶器山2号窯の調査区と検出状況(焚口方向からのぞむ)	6

表目次

(頁)

第1表 出土遺物観察表	10
-------------	----

図版目次

図版1	a.陶器山2号窯付近 調査前 b.陶器山2号窯最終床面検出状況(北西から)
図版2	a.陶器山2号窯最終床面検出状況(北から) b.陶器山2号窯最終床面検出状況(南東から)
図版3	a.陶器山2号窯最終床面断ち割り断面 b.陶器山2号窯最終床面除去の様子
図版4	a.陶器山2号窯発掘作業風景 b.陶器山2号窯出土遺物1
図版5	a.陶器山2号窯出土遺物2 b.陶器山2号窯出土遺物3
図版6	a.陶器山2号窯出土遺物4 b.陶器山2号窯出土遺物5

第1章 調査地の立地と遺跡

第1節 調査地の立地

調査を行った地は、泉州丘陵の東端にあたる丘陵地域にあり、西を堺市の前田川、東を狭山池のある谷を北流していた旧天野川（狭山池以南は現西除川）によって画される陶邑窯跡群陶器山地区に属する。分水嶺となって南北に延びる丘陵尾根の西側（堺市側）は、小規模な谷が複雑に入り込む地形であるのに対し、東側（大阪狭山市側）は狭山池主谷と呼ばれる大きな谷に向けて大小の谷がありながらも、次第に段丘面が形成されている。調査の対象となった地は、この東へのびる尾根の一つにある。

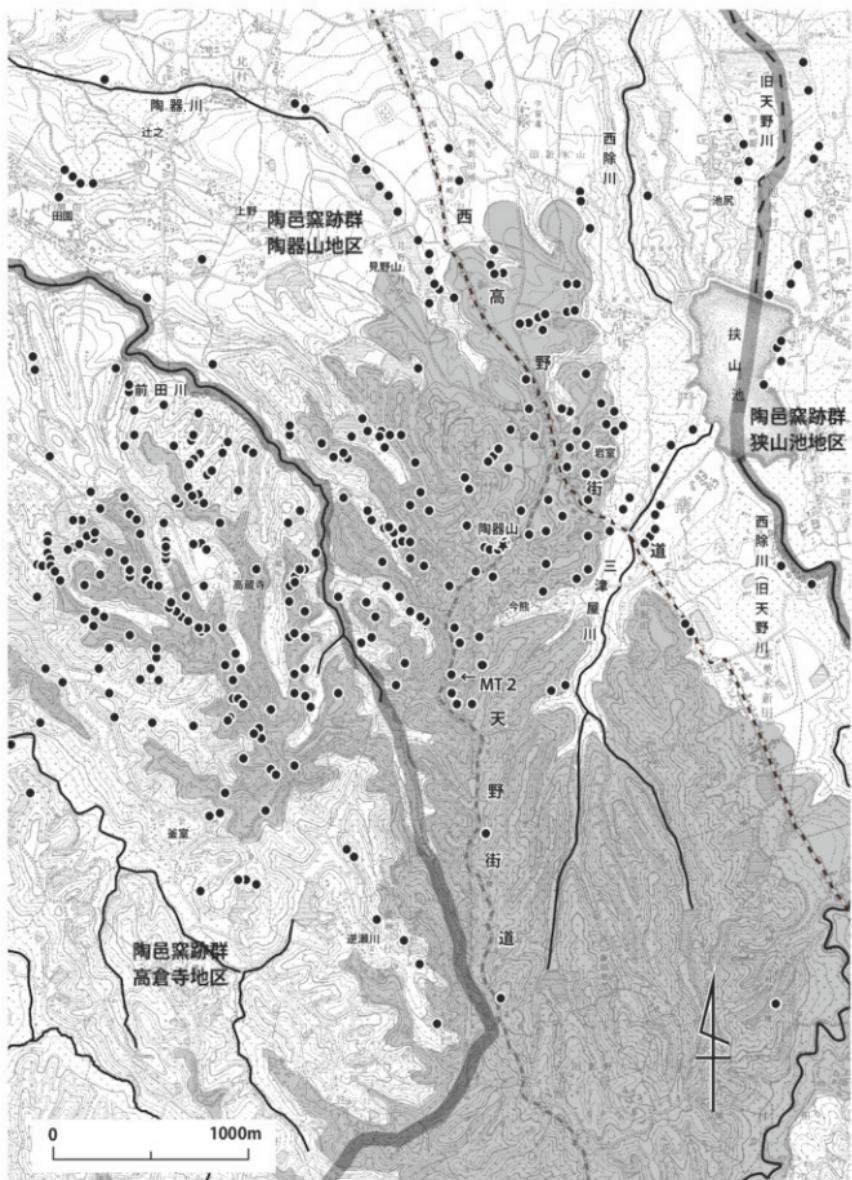
第2節 陶邑窯跡群と金蔵寺跡

調査地は古墳時代の須恵器生産遺跡である陶邑窯跡群陶器山地区及び平安時代の社寺跡である金蔵寺跡の両者に包括される。陶器山2号窯（MT2）については、1962年の分布調査（文献6 大阪府教育委員会 1963）や本市教育委員会の分布によって（文献2 植田 1999）天野街道に分断される位置に窯跡が比定されていた。また『狭山町史』には、「I期後半」（このI期は5世紀）の時期の窯跡である記録がなされている（文献9 狹山町役場 1967）。しかしながら大阪狭山市埋蔵文化財分布図では、天野街道から約50m 東の南東斜面上にその地点を示していたため、いずれが正確な位置であるかがわからずにいた。

金蔵寺については、熊野三所権現（現在の三都神社）の境内にあったとされる神宮寺であったというが、詳しく述べては不明である。明治初年の神仏分離で廃寺となつたが、三都神社周辺の小字地名をみると、広大な地域にわたる寺院であった様子が伺われる。調査地の尾根一帯には「西室」という小字名が伝えられている（文献4 大阪狭山市史編さん委員会 2000）。また、西高野街道から分岐し、陶器山をぬけて尾根筋上を南方の河内長野市にある天野山金剛寺へ向かう天野街道は、参詣道として国境や郡境の尾根道として古くから人の往来があったようである。



第1図 調査地周辺の小字名



第2図 陶邑窯跡群 陶器山地区周辺窯跡分布図 (1/25,000)
※明治25年測量図をベースに使用、濃い色は標高100 m以上の範囲

第2章 調査に至る経過

第1節 調査方法

雑木林である延べ2万mに及ぶ調査地からは、一帯にひろがる陶邑窯跡群の未知の須恵器窯あるいは中世に遡る寺院である金蔵寺跡に関わる遺構が確認される可能性が想定された。調査方法としては、開発業者と協議を行った結果、重機による樹木の抜根と同時に遺構の有無確認を順次行い、遺構等が発見された範囲については本調査を実施するとの方針で進めることを取り決めた。ただし陶器山2号窯の地点が示されている場所においては、先行してトレーナーを設定し窯跡の有無を確認する方法をとることとした。

第2節 陶器山2号窯本調査への経緯

大阪狭山市埋蔵文化財分布図に窯跡の地点が示された所については、抜根に先だって調査を行った。北東方向に伸びる尾根の付け根に近い南斜面中腹と斜面裾において確認を行ったが、窯体や灰原などの遺構あるいは須恵器などの遺物は全く認められなかった。ドットが示された地点には窯が存在しなかったということが確認された一方で、陶器山2号窯の位置がずれていのではないかとの可能性をふまえながら、抜根作業に付いて調査を続けた。

1962年に行われた分布調査（文献6 大阪府教育委員会 1963）の記録に「天野街道が窯の焚口付近を横断している・・・」と記されていた地点、さらに植田氏が記した「大阪狭山市内の須恵器窯の分布図」（文献2 植田 1999）による天野街道上の44地点に注意しながら天野街道沿いの抜根を慎重に見守っていたところ、腐植土を除去するとただちに焼土・須恵器片・窯壁片が現れる箇所を発見した。急速、調査が必要な範囲を確保し本調査へ切り替える準備に入った。なお、この後も同様に調査を続けたが、申請地内においてこれ以外に遺構等は確認されなかった。



写真1 陶器山2号窯から狭山池方面（北東）を見る



第3図 調査位置図(1/2,500)

第3章 調査の成果

第1節 陶器山2号窯の発掘調査

1. 遺構

概況 窯跡が発見されたのは、陶器山山頂から天野街道沿い、約700m南方の天野街道の切り通し東側である。地形的には、前田川へ開口する小支谷の最も谷奥で、言いかえれば分水嶺となる丘陵尾根の丘頂に近い西北斜面である。標高140～150m付近に立地する。

厚さ約10cmの表土を除去すると、須恵器窯に由来する青灰色に還元された土や窯壁塊、黄色粘土の地山面が熱を受けて酸化し赤色に変化した窯体の痕跡を確認することができた。窯体の検出を行った結果、遺存していたのは床面の一部分であると判明し、窯体の天井・側壁・焚口などは全く失われていた。

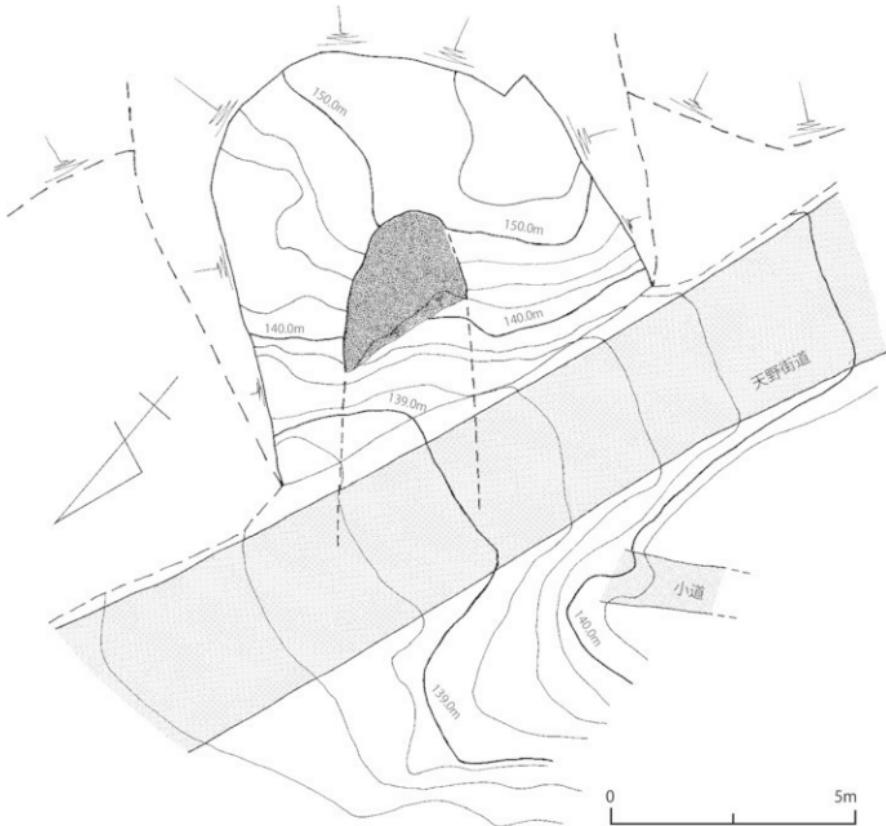
窯体 検出された床面の規模は、主軸の斜面長で1.78m、幅1.72mを測る。主軸はN-39°-Wで天野街道側に焚口を開口するように築かれる。黄色粘土の地山層をベースとして僅かであるが窪みがあり、そこに最大で厚さ約12cmの灰色系の砂質層が堆積し、これが床面を構成する層と認められる。床面に接する黄色地山面は被熱により3～10cmの厚さで赤色に変化し、さらに平面的には還元化された灰色床面層の周縁を取り巻くように幅10～60cm程の範囲が赤色に変化している状況がみられる。

床面平面の形状はU字を逆にしたような形で上部が丸くすぼまる状況や、削平を受けたと考慮しても検出された位置が尾根の頂部に近い平坦な地点であることから、検出された部位は窯体の奥壁に近い焼成部の上部であろうと推測できる。南側上部の一部と北側下部脇の一部は木の根により抉られており、さらに南東側は戦前の天野街道改修工事の影響で切り通し状に削られたため欠損している。また窯体下部の燃焼部・焚口・灰原は天野街道に分断され、それより下方は堺市域となるため残存状態は不明である。なお堺市域に含まれる窯の調査は未調査であると聞いている。

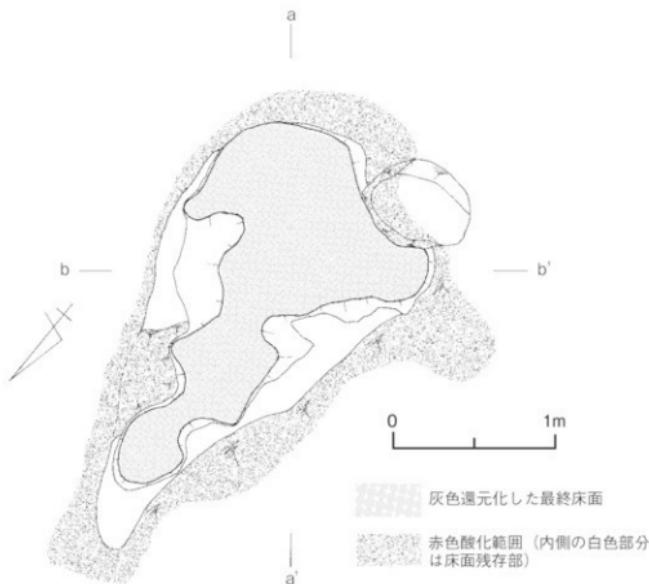
床面 床面の傾斜角度は23度を測る。床面を構成する層は基本的には炭・窯壁片を少量含むやや硬化し還元化した灰色砂層で厚さは10cm前後である。上位に淡灰色砂と、その下にある硬化した灰色砂層が最終操業を構成する床面であると認識する。第6図の横断面図を見ると、最終操業床面の下位に褐色系の砂質土を挟み、それを除去すると均質でしまりの良い約2cmの灰赤色砂層の平坦で硬化した面が現れる。おそらくこの面も床面であった可能性があり、最終操業以前に操業が行われたが、次の操業のために片付けられた状態が残ったものではないかと考える。最後にこの層を除去すると、黄色の地山と対比するように全面が赤色に変化した逆U字形状の窯体の酸化被熱範囲が現れる。



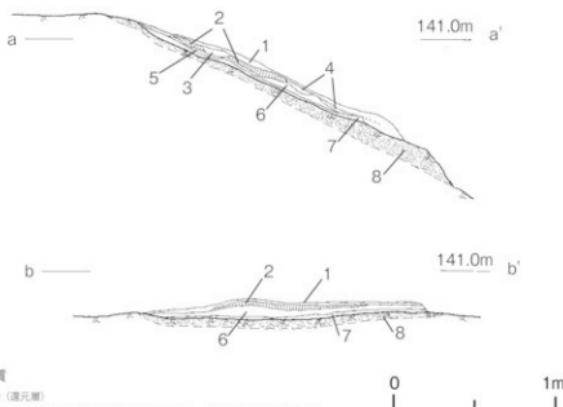
写真2 陶器山2号窯の調査区と検出状況
(焚口方向からのぞむ)



第4図 調査区平面図 (1/100)



第5図 陶器山2号窯平面図（1/30）



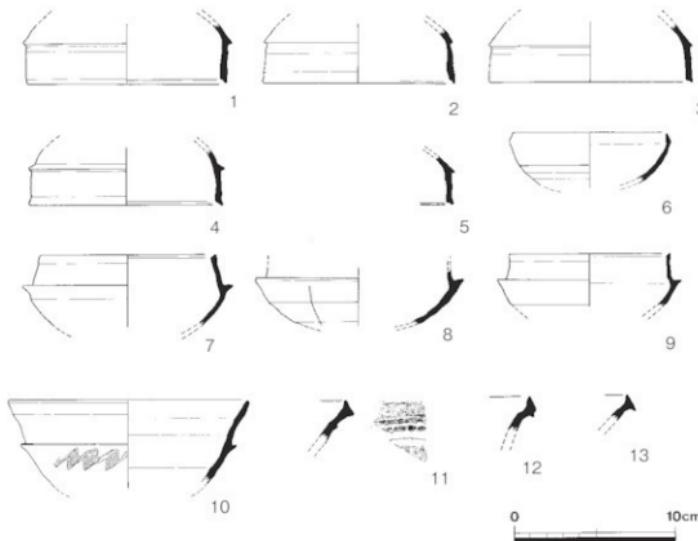
- 層・横断面図土色土質**
1. 10YR5/3に近い黄褐色砂（還元層）
 2. 10YR4/2灰黄褐色粘質土（還元層、炭・窯壁片少量含む、しまり良。この層の上面は最終床面）
 3. 10YR5/2灰黄褐色砂（しまり弱）
 4. 10YR4/6褐色粘質土
 5. 7.5YR5/4に近い褐色砂質土
 6. 10YR3/2紫褐色粘質土（炭・窯壁片少量含む）
 7. 2.5YR3/2灰赤色砂（還元層、上面は平坦でしまり良、床面の残り）
 8. 10YR4/6赤色砂礫混粘質土（赤色酸化層・地山）

第6図 陶器山2号窯縦断面図（上）（1/30）・横断面図（下）（1/30）

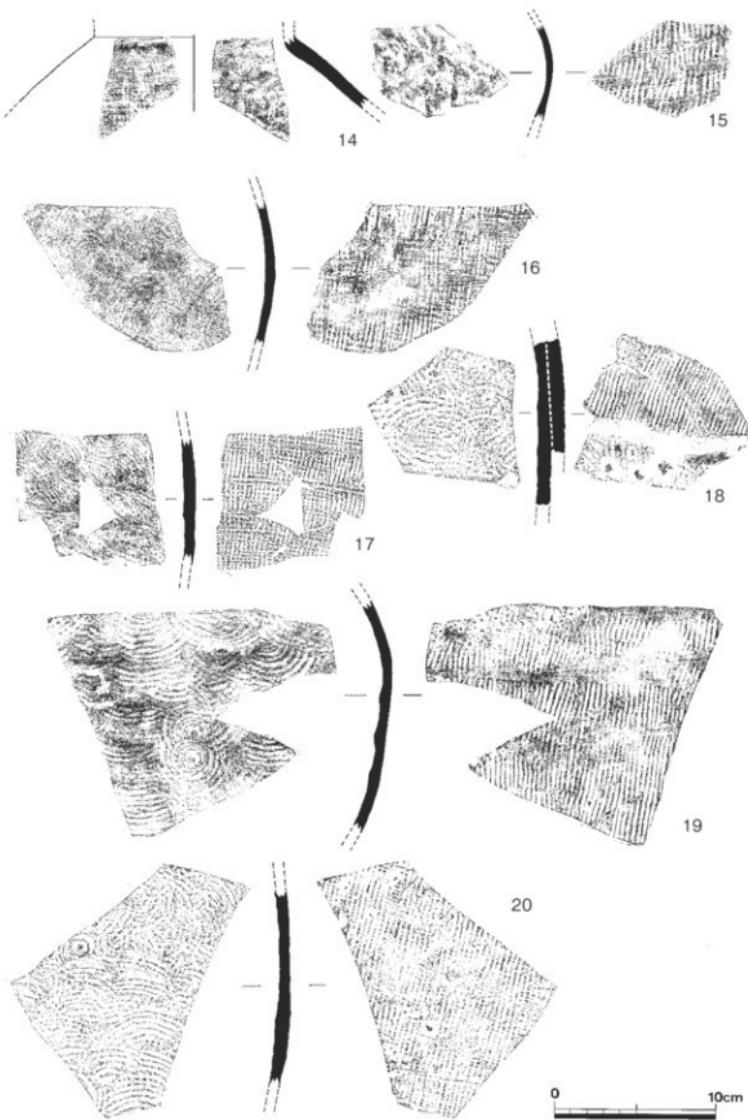
2. 遺物

遺物の出土状況については、窯体床面などからのものはごく少量であり、出土した遺物のほとんどは表土層からのものである。出土した遺物は整理用コンテナに3箱分の須恵器・窯壁であり、小片も1点と数えて203点ある。そのうち杯類片は34点、壺片は154点である。杯類については小片がほとんどであるが、実測可能なものはできる限り掲載した。器種には蓋杯(杯蓋・杯身)・無蓋高杯・壺・壺がある。

1～5は杯蓋である。いずれにも天井部から口縁部の境には明瞭な稜を持ち、口縁端部には段を有する。6は椀としたが全体的に丁寧な作りである。7～9は杯身である。7・9は口縁端部に明瞭な段を持ち、受部のつくりは比較的鋭い。8は口縁端部を欠損し受部と体部の形態はやや新しい要素を持つ。しかしながら、その他の杯蓋の口径及び杯身の受部径は10cmから12cm代の範囲におさまる。10は脚部を欠損するが無蓋高杯である。11～13は壺の口縁部、14は壺の肩部である。15～20は壺の体部片である。体部の外面にはタタキ痕、内面には基本的に同心円の当て具痕が見られるが、内面は当て具痕を丁寧にスリ消すもの、半スリ消しの調整を施すもの、スリ消しを行わないものがあり、多くはスリ消しもしくは半スリ消しを施す。21は窯壁片で図化は行っていないが厚さは5.7cmを測り、スサを練り込んだ粘土の様子が伺え内面には窯体の内壁を手で撫でた痕跡が見られる(図版5 b 21-1)。



第7図 出土遺物実測図1 (1/3)



第8図 出土遺物実測図2 (1/3)

第1表 出土遺物観察表

	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯蓋	口径12.2cm 残存高3.7cm	口縁部と体部との境の棱は強い。口縁部はやや内傾ぎみに下り、端部内面に段を持つ。	外面・内面:回転ナデ	胎土:密、1mm以下の長石僅かに含む。焼成:良好。色調:赤灰褐色。残存1/8、反転復元。
2	杯蓋	口径12.0cm 残存高3.4cm	口縁部と体部との境の棱は強い。口縁部はやや外反ぎみに下り、端部の段は明瞭である。	外面・内面:回転ナデ	胎土:密、1mm以下の長石・黒チャート僅かに含む。焼成:良好。色調暗青灰色。残存1/10以下、反転復元。
3	杯蓋	口径12.7cm 残存高3.7cm	口縁部と体部との境の棱は強く、口縁部はまっすぐに下る。端部の段は浅い。	外面・内面:回転ナデ	胎土:密、2mmの長石チャートを僅かに含む。焼成:良好。色調:黑灰色。残存1/10以下、反転復元。
4	杯蓋	口径12.0cm 残存高3.5cm	口縁部と体部との境の棱は外方へ突出する。口縁部は丸みを持ちつ端部は外反する。端部の段はあまり平らに近い。	外面・内面:回転ナデ	胎土:密、1mmのチャートを僅かに含む。焼成:やや軟質。色調:褐灰色。残存1/10以下、反転復元。
5	杯蓋	残存高3.1cm	口縁部と体部との境の棱は強い。口縁部はまっすぐに下り、端部で外反する。内面に段を持つ。	外面・内面:回転ナデ	胎土:密、1mm以下の長石僅かに含む。焼成:良好。色調:赤褐色。残存1/10以下、反転復元不可。
6	椀	口径9.6cm 残存高3.3cm	体部から口縁部にかけて丸みを持ち、端部で内側へ頗る屈曲する。	外面:回転ナデ (口縁部)・回転ヘラ削り (体部2/3) 内面:回転ナデ	胎土:密、1mm以下の長石僅かに含む。焼成:良好。色調:墨灰色。残存1/10、反転復元。
7	杯身	口径10.8cm 受部径13.0cm たちあがり高19cm(角度14°) 残存高4.5cm	たちあがりは内傾してのび、端部に浅い段を持つ。受部は水平にのび、体部側にやや強めのナデを施す。端部は細くなる。	外面:回転ナデ・回転ヘラ削り (頭で範囲不明瞭) 内面:回転ナデ	胎土:密、4mm以下の長石チャートを含む。焼成:良好。色調暗灰色。残存1/6、反転復元。
8	杯身	受部径13.0cm 残存高3.6cm	口縁部を欠損。受部は水平よりやや上方ぎみにのびると思われる。	外面:体部4/5は回転ヘラ削り 内面:受部 外面:回転ナデ	胎土:密、1mmの長石を僅かに含む。焼成:良好。色調:灰色。残存1/6、反転復元。底部外面にヘラ記号有り。
9	杯身	口径10.0cm 受部径11.4cm たちあがり高17cm(角度3°) 残存高3.3cm	たちあがりはまっすぐ上方にのび、端部に明瞭な段を持つ。受部は水平にのび、端部は頗る仕上げる。	外面:体部3/4は回転ヘラ削り 内面:受部 外面:回転ナデ	胎土:密、1mmのチャートを僅かに含む。焼成:良好。色調:墨灰色。残存1/10、反転復元。
10	無蓋高杯	口径14.9cm 残存高5.4cm	体部から口縁部は上外方に開き、口縁端部は丸く仕上げる。口縁部と体部の境に棱を有し、その下方に波状文を施す。	外面・内面:回転ナデ	胎土:密、2mm以下の長石を含む。焼成:良好。色調:青灰色。残存1/10、反転復元。
11	甕 (口縁部)	残存高2.7cm	口縁端部は断面三角形に近く、端部外面は平坦面を持つ。一糸の突線の下に波状紋を施す。	外面・内面:回転ナデ	胎土:密、1mm以下の長石・チャートを僅かに含む。焼成:良好。色調:灰青色。残存1/10以下、反転復元不可。
12	甕 (口縁部)	残存高2.2cm	口縁端部内面やくぼみ、外面は平坦面を持つ。その下には帯状状に段ができる。	外面・内面:回転ナデ	胎土:密、1mm程度のチャートを僅かに含む。焼成:良好。色調:淡灰色。残存1/10以下、反転復元不可。
13	甕 (口縁部)	残存高1.8cm	口縁端部断面はT字状を呈し、端部は平坦に頗る仕上げる。	外面・内面:回転ナデ	胎土:密、1mm程度の長石僅かに含む。焼成:良好。色調:暗灰色。残存1/10以下、反転復元不可。
14	壺 (肩部)	頭部径12.4cm 残存高4.7cm	口縁部欠損。体部へは「ハ」字状に開き外面にはタッキの後カキ目を施す。	外面:タッキ・カキ目 内面:回転ナデ	胎土:密、1mm程度のチャート僅かに含む。焼成:良好。色調:外腹灰青色・内面灰褐色。残存1/10以下、反転復元。
15	甕 (体部)	残存長6.0cm	外面はタッキの後、カキ目を施す。内面はあるて具皿をはすシリ消しの状態。	外面:タッキ・カキ目 内面:シリ消し	胎土:密、2mm以下のチャートを僅かに含む。焼成:良好。色調:外腹灰青色・内面灰褐色。残存1/10以下、断面のみ。
16	甕 (体部)	残存長9.3cm	外面はタッキの後、カキ目を施す。内面はあるて具皿をはすシリ消し状態である。	外面:タッキ・カキ目 内面:シリ消し	胎土:密、2mm以下のチャート僅かに含む。焼成:良好。色調:外腹灰青色・内面灰褐色。残存1/10以下、断面のみ。
17	甕 (体部)	残存長8.0cm	外面は格子状タッキの後、カキ目を施す。内面はあるて具皿を半スリ消しの状態。	外面:タッキ・カキ目 内面:半スリ消し	胎土:密、1mm以下の長石僅かに含む。焼成:良好。色調:灰青色。残存1/10以下、断面のみ。
18	甕 (体部)	残存長10.3cm	外面にはタッキ、内面には同心円である具瓶が見えるが半スリ消しの状態である。外面上に別個の要片が融着する。	外面:タッキ内面:半スリ消し	胎土:密、1mm以下の長石僅かに含む。焼成:良好。色調:灰青色。残存1/10以下、断面のみ。
19	甕 (体部)	残存長14.5cm	外面にはタッキ、内面には同心円である具瓶が残る。	外面:タッキ内面:半スリ消し	胎土:密、1mm程度のチャートを僅かに含む。焼成:良好。色調暗灰色。残存1/10以下、断面のみ。
20	甕 (体部)	残存長12.7cm	外面にはタッキ、内面には同心円である具瓶が残る。	外面:タッキ内面:具瓶	胎土:密、1mm以下の長石僅かに含む。焼成:良好。色調:灰青色。残存1/10以下、断面のみ。
21	窓壁	厚5.57cm			実測図なし。写真あり

第4章　まとめ

陶器山2号窯の選地について

天野街道は尾根の稜線と重なるような道であるが、それに分断された状態で確認した陶器山2号窯は、北西方向の天野街道側に焚口を向けて築かれている。須恵器窯が築かれるのは水系に近い谷筋が多いなか、陶器山2号窯のように丘陵尾根上近くに築かれた理由には、中村氏が指摘するように（文献12中村1992）尾根筋づたいを北方へ下る山道があり、そちらの方が険しい谷を下り製品を運ぶよりも有利だったのではないかと考えられる。ちょうどその道は後世の天野街道と重なっている。街道の成立は定かではないものの、江戸初期の絵図には「尾根道」の記載があるのをみると、中世以前に尾根道があっても不自然ではないのではないかと考える。ちなみに南へ向かう天野街道の起点は大阪狭山市岩室であるが、北へは西高野街道（堺市域）と通じている。

陶器山2号窯の窯体と出土遺物

今回の発掘調査成果としては、窯体の残存状態は必ずしも良好ではなかったが、床面の一部が残存していたことで窯体の位置や方向が確定したことと、その窯の時期が出土遺物により明らかになったことである。蓋杯をはじめとする遺物の形態や特徴から田辺編年のTK47型式に併行する時期（5世紀末頃）の須恵器を焼成していた窯であることがわかった。ただし、遺物の中には新しい要素を持つものがあり、幾度かの操業によって6世紀以降も生産を行っていた可能性も考えられよう。

金蔵寺の課題

金蔵寺については、現在のところ考古学的に明確な遺構遺物はわかっていないものの、以前に三都神社東側の今熊地区集落内「門の内」という小字名を持つ所での小規模な調査からではあったが、室町時代の遺物が出土している（文献3大阪狭山市教育委員会2002）。今回の調査では金蔵寺に関して何ら明らかにはできなかったが、今後知見の加わることを期待したい。

参考文献

1. 和泉丘陵内遺跡調査会 1992年『陶邑古窯跡群一谷山池地区的調査一』
2. 植田隆司 1999年『陶邑窯跡群東端の窯跡分布』『狹山池 論考編』狹山池調査事務所
3. 大阪狭山市教育委員会 2002年『大阪狭山市内遺跡群発掘調査概要報告書 12』
4. 大阪狭山市史編さん委員会・大阪狭山市教育委員会生涯学習部生涯学習推進課 2000年『大阪狭山市史 第12巻 地名編』
5. 大阪狭山市役所 1988年『大阪狭山市史要』
6. 大阪府教育委員会 1963年『陶器山周辺地域窯跡調査概報』
7. 大阪府立近つ飛鳥博物館 2006年『年代のものさし－陶邑の須恵器－』大阪府立近つ飛鳥博物館図録40
8. 堺市長公室文化部文化財課 2008年『野々井西遺跡（NNIN-1）・陶邑窯跡群（ON231）発掘調査概要報告』
9. 狹山町役場 1967年『狹山町史 第1巻 本文編』
10. 田辺昭三 1981年『須恵器大成』角川書店
11. 中村浩 1981年『和泉陶邑窯の研究』柏書房
12. 中村浩 1992年『須恵器窯跡の分布と変遷』雄山閣出版
13. 宮崎泰史 2007年『陶邑窯跡群と窯跡の分布について』『町大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館2005年度共同研究成果報告書』

図 版



a. 陶器山2号窯付近 調査前



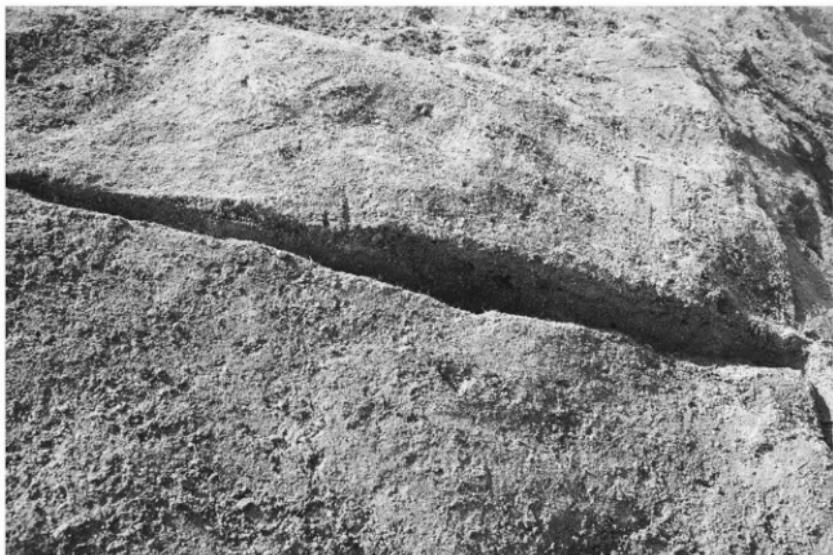
b. 陶器山2号窯最終床面検出状況（北西から）



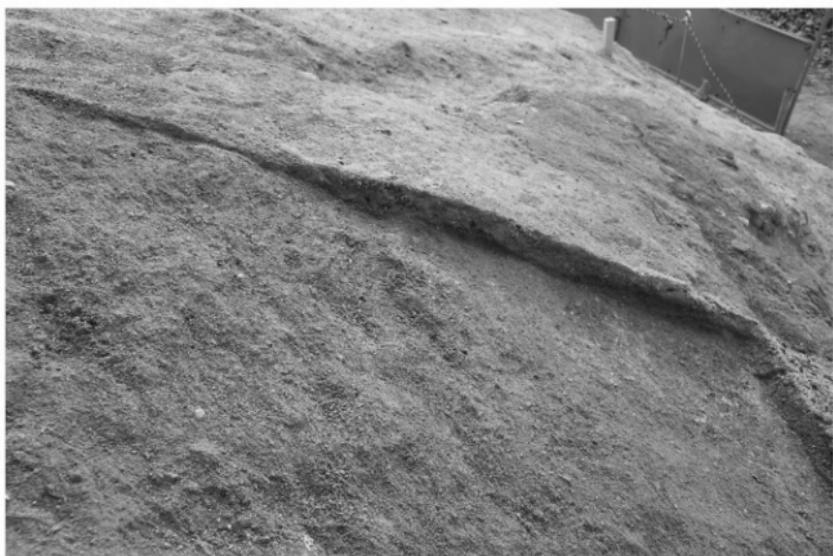
a. 陶器山2号窯最終床面検出状況（北から）フェンスに沿った道は天野街道



b. 陶器山2号窯最終床面検出状況（南東から）天野街道をはさんで斜面下方は堺市域



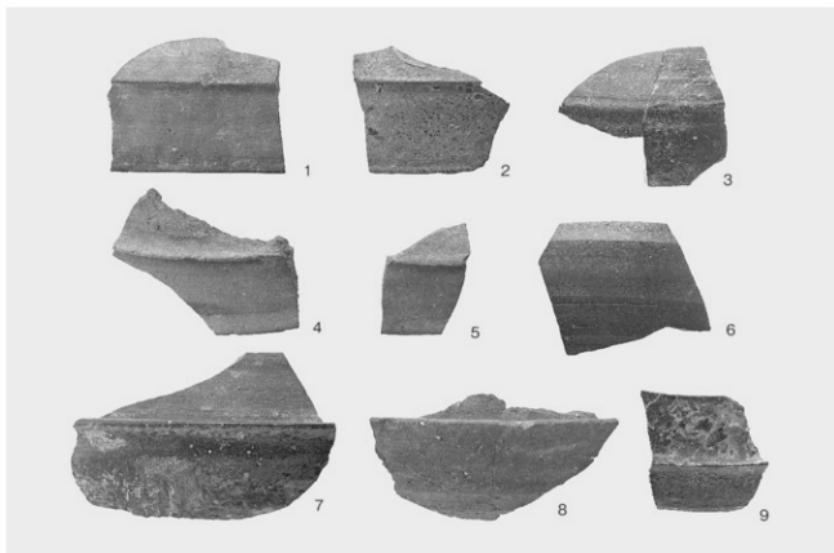
a. 陶器山2号窯最終床面断ち割り断面



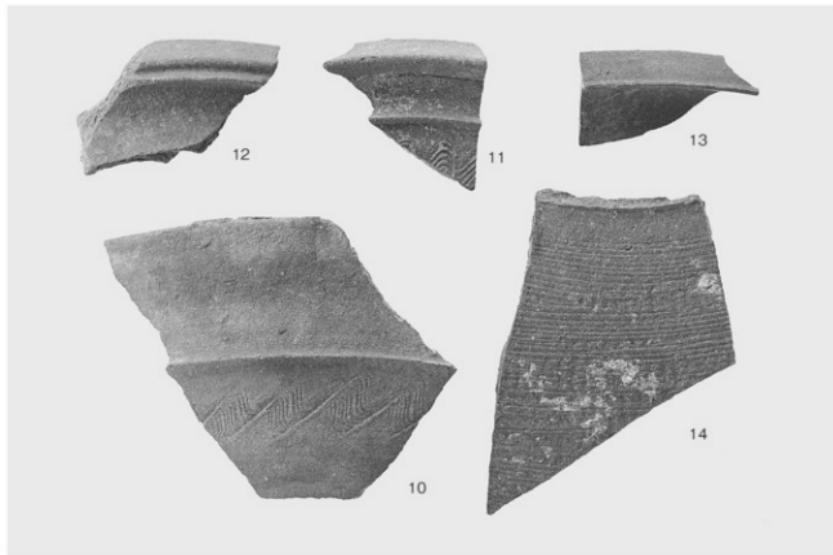
b. 陶器山2号窯最終床面除去の様子



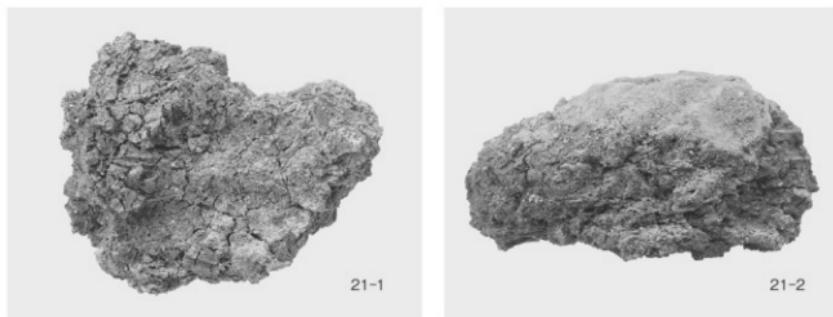
a. 陶器山 2 号窯発掘作業風景



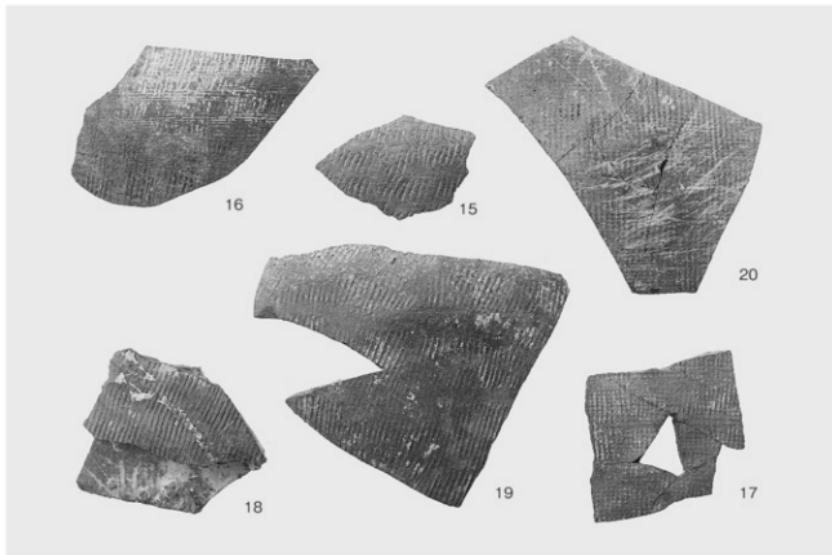
b. 陶器山 2 号窯出土遺物 1　杯蓋・杯身・棕



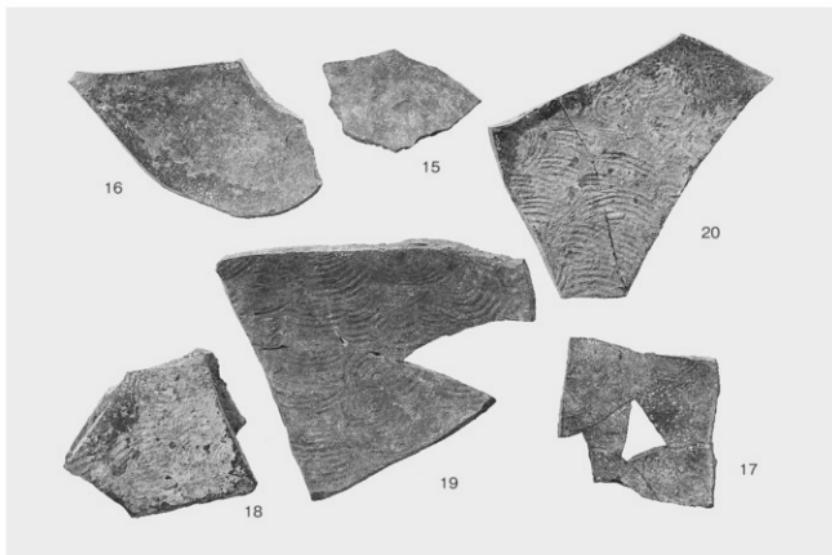
a. 陶器山 2 号窯出土遺物 2 無蓋高杯・壺 (口縁部)・壺



b. 陶器山 2 号窯出土遺物 3 窯壁片



a. 陶器山 2 号窯出土遺物 4 壺（体部外面）



b. 陶器山 2 号窯出土遺物 5 壺（体部内面）

報 告 書 抄 錄

ふりがな	すえむらかまあとぐん とうきやま 2ごうがま							
書名	陶邑窯跡群 陶器山2号窯							
副書名								
卷次								
シリーズ名	大阪狭山市文化財報告書							
シリーズ番号	40							
編著者名	土江 文子							
編集機関	大阪狭山市教育委員会							
所在地	〒 589-8501 大阪府大阪狭山市狭山一丁目 2384-1 TEL 072-366-0011							
発行年月日	平成 24 年 (2012 年) 11 月 30 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積	調査原因
すえむらかまあとぐん 陶邑窯跡群 金蔵寺跡	おおさきやまとく 大阪狭山市	市町村	遺跡番号	34° 29' 18"	135° 32' 21"	2011年1月5日 ～ 2011年2月10日	全体： 20816.10 m ² (陶器山2号窯：64 m ²)	宅地開発
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
陶邑窯跡群 陶器山2号窯	生産遺跡	古墳時代	陶器山2号窯の窯体(床面)一部と須恵器を検出し、その位置と時期が判明。5世紀末頃の須恵器窯であることがわかつた。		須恵器(杯蓋・杯身・無蓋高杯・壺・甕)			

大阪狭山市文化財報告書 40

陶邑窯跡群 陶器山2号窯

発 行 日 平成24年（2012年）11月30日

編集・発行 大阪狭山市教育委員会
大阪府大阪狭山市狭山一丁目2384番地の1

印 刷 橋本印刷株式会社
奈良県葛城市竹内365番地1